名寄市病誌　13：47～50，2005

随想

京都学派の総師　西田幾多郎の哲学（その２）
－深層心理，精神病理との関わり－

上川北部医師会　会長　中村　稔

－本稿は名寄短期大学道北地域研究所「地域と住民」第21号（2003年３月）の再掲に追補，訂正したものである．－

１．「善の研究」と深層心理

本「年報」第20号で述べたように，西田哲学は“日本の急速な「近代化」に由来する焦燥の中で，日本における「近代的個人」の精神的支柱を索めて出発した哲学”であり[1]，大正デモクラシーを基礎づける哲学だった[2]．しかし西田の場合には，うち立てられた個人＝自己とはデカルトの“コギト”に代表されるような意識的自己＝自我（エゴー）ではなく，多感な明治の青年の多くに共通する悲哀感を帯びた悩める自己（セルフ）だった．

確かに，「アリストテレスの哲学の出発が驚異であり，デカルトのそれが懐疑であり，キルケゴールが絶望から出発したように西田哲学のモチーフは悲哀であった[3]．」．悲哀を帯びた自己は理性的な意識的自己ではなくて，感情を帯びた自己であり，受苦（パトス）を帯びた自己である．そこでは身体と精神，主観と客観は同一化された“直接経験”によってしか自己を捉えられない．こうして西田が辿りついたのが，“善の研究”のモチーフとなった“純粋経験”だった[4]．それは内部生命的な自己の展開に他ならない．そして，西田の“眞の自己”の孕む問題を映し出しているのは，若くして自ら生命を絶った北村透谷の“内部生命論”である[5]．「心に秘宮あり，宮の奥には他の“秘宮”あり，その第一の宮には人の来り観ること許せども，その奥の“秘宮”には各人鑰（カギ）して容易に人を近づけず．」．山田宗睦は，西田の「善の研究」執筆時に書かれた「哲学的研究」という断章のなかでの「人心は無限なる欲求の体系と見るべきもので，その中心が自己であり，これに因りて統一していくのが生命である．官欲が中心となり，生活意思が唯一の生命であるかの様に見える．併し理性的人心の中心は此処にあるのではない．更に眞の中心において生命そのものを反省する．」を引用して，透谷と西田の関連を，「西田幾多郎の“善の研究”はじつに透谷の「内部生命論」の哲学化だった．」と言い切っている[6]．透谷の秘宮が西田の眞の自己と結びつくのは勿論のこと，各人の「宮内の秘宮」の関係は，Ｃ・Ｇユングの「自我（エゴー）－自己（セルフ）」と同様と言ってよい．この問題を日本人の立場からはっきり捉えて，河合隼雄は，ユングの〈自我（エゴー）－自己（セルフ）〉モデルを巧みに発展させ，西洋人と日本人の心の構造を一見してわかるように示した[7]．（図１）

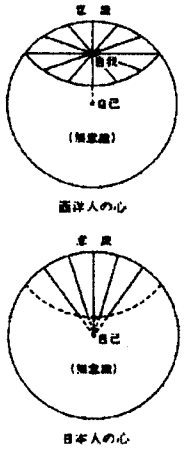

図１

西洋人の場合には，自我を中心として，それ自身まとまりを持った意識構造をもち，日本人の方は，それだけではまとまっていないようでありながら，実は意識の深部の中心＝自己（セルフ）へと心が収斂していく構造をもっている．西田は深層心理学者ではないが，彼の自己の捉え方はユング＝河合モデルと驚くほど照応している．西田は“無意識”という概念を認めず，それを意識の深化と捉えていたが，“眞正の自己”を求める思索の深まりのなかで到達したのが，意識の深部の中心＝自己（セルフ）だったのである．それはフロイト，ユングと共通する人類一般の無意識＝心の深層の発見だった，と言ってよい．

“善の研究＝純粋経験”は決して日本思想だけを哲学的に基礎づけたものではない．“純粋経験”は同時代のＷ・ジェームスやＭ・マッハよりもダイナミックだったばかりか，ベルグソン，フッサールが企てた哲学の変換を先取りしていたと言って

よい[5]．しかも，モチーフとなった“純粋経験と自己”についての考え方は，むしろ，人類に共通な，かつ20世紀の哲学や思想にとって切実なものとなった“直接経験”や“身体行為的自己”や“無意識”，“自我（エゴー）－自己（セルフ）”と言う問題に，近代日本人として己れの思索を深めながら，世界に先駆して深く鍬を入れたものであった．

2．「場所」と精神分裂病他

“場所”とは，ギリシャ哲学以来，プラトンのコーラ，アリストテレスのトポスなど由緒ある問題である[5]．所が西洋の近代哲学では，基体である“場所”は全くかへりみられなかった．“場所”の反対概念は主体＝主観＝時間であるが，それが基体となったからであろう．デカルトの“われ思う，ゆえに我あり”はそんな近代ヨーロッパ人の欲求を根拠づけた画期的な主張であった．しかし，主体＝主観の自立と能動性を前提として，外界や自然に対する働きかけや支配が進められ，その可能性が殆んど実現されそうになって，その行きすぎが人間生存の基盤－例えば生態系（エクスキュルの“環境世界”）－を突き崩すことが明らかになった．即ち西洋人の“自己（セルフ）”と区別された“自我（エゴー）”の自立への疑いである．こうして1960年代になって意識的自我の存在根拠を形づくるものとして，改めて共同体や無意識が意識されるようになった．それからはかならずしも空間的場所を形づくるものではないが，意識的自我がそこにおいて成り立つ“場所”である．それは，時間に対する空間＝場所の重要性の確認と言ってよい．しかし，現代において，“場所”の問題を最も根底から「哲学の問題」として取上げ，アリストテレス以来のヨーロッパ哲学を支配していた“主語の論理”とは別の“述語の論理”にラディカルな変換を企てたのが西田の“場所の論理”だった．（1927年）三木清が“コペルニクス的転回”と呼んだことは本「年報」第20号で述べた[8]．それでは“述語論理”と“心の深層”の関わりは何なのであろうか．分裂病者に展開されるのは，“述語的同一性”の世界である．では，“述語的同一性世界”とは何か．例えばここに三段論法の“かたち”をとった言述がある．

“私は処女です．聖母マリアは処女です．私は聖母マリアです”．

これは，三段論法の“かたち”をとっていても通常の論理ではない．通常の論理は主語の同一性によって統一されているからである．

“すべての処女は聖母マリアに憧れる．彼女は処女である．彼女は聖母マリアを憧れる”が普通である．

このようなかたちの述語論理が分裂病のうちに特徴的に見出されることに着目したのは精神医学者のR・フォン＝トスルス（1944年）であり[9]，シルヴァーノ・アリエティ（1976年）は，この論理を“古論理（バイオロジック）”と呼び分裂病者に特徴的に出現するばかりでなく，そこに人間の創造性の源泉をみている[10]．これと西田の“場所の論理”がそんなにはっきりと結びつくのか．この疑問に答えたのが木村敏の「分裂病の現象学」である[11]．木村は述べている．分裂病者の世界には心的非連続性が見出されるが，これを病者自身の立場に立って理解しようとすると，“世の正常な論理”や“悟性の論理”では役に立たず，西田の“場所の論理”が最もすぐれた論理としての意味を持ってくる．

木村によれば，思考過程においても言語表現においても，個物に関しては観念や概念は，それぞれ非連続的に存在し，独立しているのにも関わらずそれが通常われわれにとって連続したものとして感じられるのはどうしてか，それは，われわれが“自己の底から述語面でこれを包摂して，個物と個物，概念と概念との間に連絡をつけている”ためである．だが，このように「非連続な主語面に統一的連続性を貸与する述語面が，全く異質なものに変って，われわれ自身の“見知らぬ”述語面によって主語面（概念や観念）が統一された」としたら，主語面は，われわれにとって，“全く連続性を失って不統一・非連続なもの”と見られるようになる．一般に分裂病者の“滅裂思考”とか“分裂症語”とか言われているものは，西田の論理からみれば，“このような「異次元」の述語面によって統一された観念や言語の様式”だということになる．ここにいう“見知らぬ”述語面とは，西田のいう“超越的述語面＝絶対無の場所”にほかならない．分裂病者の場合，それが西田のいう“相対無”や“有”との結びつきを失って，隔絶的なかたちで“有の場所”に出現したものと考えられる．さらに西田は，自覚ということを私が私ならざるものに出会うその“場所”において成立するものと考え自己と他者との人格的な相互関係について突っ込んだ考察を行った．そしてその叙述は，「そっくりそのまま，精神分裂病者の無媒介的な妄想的自覚の描写として用いうる．」と木村は述べて，西田の論文集「私の汝[12]」のなかの迫力に富んだ一節を引いている．

「自己が自己自身の底に自己の根底として絶対の他を見ることによって自己が他の内に没し去る，即ち私が他において私自身を失う，之と共に汝も亦この他において汝自身を失わなければならない．私はこの他に於いて汝の呼声を，汝はこの他に於いて私の呼声を聞くということができる．」

昔から鮮明に記憶に残っている人間の心の奥底を覗きこんだような凄い叙述を30年以上も経って，「分裂病の現象学」でみた時には身のふるえるような思いがした．自己と他者との根源的人格的なまざり合い，自己の喪失感や幻聴などの症状が表現されている．

西田は精神病理学者ではないが，己れの思索を深めながら人間存在の根源－狂気に辿りついたことは自明であろう．

“場所”と精神病理との関わりはまだある．

ユング派の心理療法として知られるようになった“箱庭療法”である．分裂病において，枠のある矩形の台（60×70×7cm）のなかに，砂とミニチュアの人形，動物，建物，乗り物，柵などを用いて，自分の好きなように一つの世界を形づくらせるものである．この場合，患者は砂に触れつつ，自己の深層をイメージ化して表現するようになり，そのようにして得られた世界と一体化－世界と自己の共通の“場所”の成立が，心理療法としての効果をあげている[13]．又，河合隼雄は「“箱庭療法”は被虐待児の心理療法に有効だと私は思っている．ただし，治療者が相当に訓練されていてこそ成功するものであり，“箱庭”を作らせれば治るほど単純ではない[14]．」．

高安マリ子は，「精神分裂病のダンス療法[15]」において，セラピストが十分訓練を積んだ経験者であることを前提として，「セラピストは，“無我”－思ひや考えが消失した世界に入る．これによって，“セラピスト”の身体内外の空間がつながり“セラピー”が行われる場”となる．これが患者の感じた皮膚感覚を通じて“共通の場”ができあがり治療効果がでる．」．

河合・高安，いずれも“場所”の重視が通底しているのは論を俟たないであろうし，高安の場合には，西田の言う“純粋経験”と同様と言ってよい．

しかも，1960年代からの“構造主義”は“場所の論理”であるばかりか，“反哲学（アンチフィロソフィー）”のフレーズで発信された深層人間＝子供・女性・未開人や狂人などの再発見・再評価である．これは，本「年報」第20号のあとがきで述べたように，いずれも“パトス的感性的無意識的側面”では通底しているのである．

西田は“場所の論理”において，結果として“構造主義”を1927年に先取りしたばかりでなく，木村がいうように，M・フーコの「狂気の歴史」の50年以上前に人間存在の根源－“狂気”に辿りついたのだった．

西田哲学の特色は，宗教を含めた“深層の知”としての射程の大きさである．“善の研究”の最終章が「宗教」であり，最終論文が「場所的論理と宗教的世界観」であったように，西田哲学に通底していたのは“深層の知”の象徴とも言える“宗教的トーン”（＝悲哀（著者註））であった．大きな射程をもちえたのはなぜかと言えば，西田が自分のなかで感じた実在の問題を，古今東西の哲学上の大論理と照合しつつ，三木清のいう“強靭な思索力”を駆使して徹底的に考えぬいていったからであろう．

西田哲学は例え限られた部分であっても，その積極面においては，日本にあって日本を超え，近代にあって近代を超えた哲学だったと言ってよいであろう．

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

－西田哲学と世阿弥の関わりについては，芸論，行為的直観，身体感覚＝共通感覚，教育などの概念を通じて次号で稿を改める．－

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

※（1）朝日新聞朝刊（2001年8月10日）によれば，京都大学文学部哲学科が消滅した，とあった．

京大の哲学科は，桑木厳翼・西田幾多郎・田辺元・山内得立・高山岩男・大島康正・西谷啓治（宗教哲学）・上田閑照（宗教哲学）で終わったのである．これも時代の流れなのであろう．そんななかで，西田だけが総師と言われたのであった．そして西田の“行為的直観”の概念は京大に多くの影響を与えた．上山春平によれば[16]，ユニークな生物学者の今西錦司は，明らかに西田に共感を示しながら独自の生物学を造りあげた．そして，今西自身の次のようなことばもある，と言う．「……たとえば植物の生態学をやるにしても，ものすごくこまかい方法を使って，こまかいことをやるということでなくて，じかに体当たりして，皮膚で受けと

めていく行き方，つまり媒介なしに自然を知ろう，そして，実際に知り得るのだというなにかがこちらにもあるのですな……．ぼくはやはり山でなにかしら感じる．じかにそれをハダで感じるというときに，西田さんのいう“純粋経験”とか“行為的直観”のようなものがあるのじゃないか…….」を引用している．それは，机の上で考えるよりも“フィールドワーク”と言うことであろう．その伝統を引き継いだのは，京都学派の指導者と言われた京大人文科学研究所の桑原武夫だった．“キーワード”はやはり“フィールドワーク”である．その結果，戦後，左翼的影響力が極めて大であった「大塚史学」の大塚久雄（東大名誉教授）の根本がつき崩されたのだった[17]．

※（2）平成14年6月30日の道新と朝日の朝刊によれば「精神分裂病」を「統合失調症」とすることを日本精神神経学会理事会で決定．毎日新聞7月11日朝刊では，8月26日，横浜市で開かれる総会で正式に決定すると報ぜられた．これに至るには，“患者の会”や医師陣の多くの研究や努力があったのであろう．

かつて，ヤスパースが“了解不能”と言った時代からみれば，「分裂病」も，医学の進歩によって早期に治療すれば“社会復帰”も可能となる，そんな時代になったのを見ると，今昔の感に耐えないのである．

参考文献

1）古田　光「西田幾多郎」『西田哲学選集別巻Ⅱ』燈影舎（1998）
2）出　隆『哲学以前』岩波書店（1927）
3）鈴木　亨「西田幾多郎の世界」剄草書房（1985）
4）西田幾多郎「善の研究」『西田哲学選集Ⅰ巻』燈影舎（1998）
5）中村雄二郎『西田哲学』岩波書店（1985）
6）山田　宗睦「西田幾多郎の世界－日本型思想の原像－」三一書房（1961）
7）河合　隼雄「無意識の構造」中公新書　中央公論社（1977）
8）三木　清「西田哲学の性格について」『西田哲学選集別巻Ⅱ」燈影舎（1998）
9）E・フォン＝ドスルス「分裂病における特殊な論理法則」弘文堂（1950）
10）シルヴァーノ・アリエティー「創造力－原初からの統合」白水社（1976）
11）木村　敏「分裂病の現象学」弘文堂（1975）
12）西田幾多郎「私と汝」『西田哲学選集Ⅲ巻』燈影舎（1998）
13）中村雄二郎・河合隼雄「トポスの知－箱庭の世界」岩波書店（1984）
14）河合　隼雄「母親から子供への虐待の心理療法」現代思想3　青土社（2002）
15）高安マリ子「精神分裂病のダンス療法」現代思想3　青土社（2002）
16）上山　春平「絶対無の探求」世界の名著〈西田幾多郎〉講談社（1970）
17）角山　栄「「大塚史学」との闘い」『歴史諸君！第34巻第6号』文芸春秋社（2002）

―― 訂正とお詫び ――

私は，本「年報」第18号，第19号，第20号において，初歩的なしかも決定的な誤りをおかした．

1．西田幾多郎を幾太郎としたこと．

2．西田哲学選集を西田幾太郎選集としたこと，ここで改めて訂正とお詫びを申し上げ，お許しを請う者である．